



ワーグナー：ヴェニスからのがれて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010023

ワ　ー　グ　ナ　ー

—ヴェニスからのがれて

伊 藤 嘉 啓

(1)

1つの都市もまた、個々の人間が人格をもつやうに、特徴といふよりは、個性といつた方がいゝやうなものをもつてゐるらしい。とくに、ふるい都市についてさういへるのであり、イタリアのヴェニスなどは、その最たるものの1つである。

ワグナーがチューリヒのヴェーゼンドンク家の離れからにげだして、ヴェニスについたのが、(1858年)8月29日の夕方であつた。同行のカール・リッターには、もう何度目かの、なじみの町であつたが、45歳のワグナーには、はじめて見るヴェニスである。

このとき、ワグナーも、リッターもともに、結婚生活がうまく行かず、妻との別居が2人に共通するヴェニス行きの目的の1つであつたが、一方のリッターが既知の地といふこともあつてか、大いにはしやいで、汽車の窓から帽子をとばして了つたのに対し、ワグナーの気分は暗かつた。

ワグナーは、このとき生れてはじめて、ゴンドラを見たのであるが、その第1印象を後年になつて、かう回想してゐる。

「ゴンドラには、ほんたうにびつくりした。この奇妙な、真黒にぬつた乗物については、いろいろ聞いてはゐるけれども、現物を見たときには、ぞつとして了つた。黒い布で覆はれた屋根の下に入つて行くと、わたしの頭に最初にうかんだのは、以前に味はつたコレラへの恐怖の印象と同じものだつた。わたしにはベストが流行した時の会葬に参列してゐるやうにきへ思へたので

ある」(『わが生涯』, Gregor-Dellin 編, S. 586)

Gondラを柁とか、霊柩車とかに、見立てるのは、何もワーグナーがはじめてといふわけではなく、それより早く多くの人が云つてゐて、ゲーテもその1人であり(たとへば、ヴェニスのエピグラムの1節)、ワーグナーも、先に引用した箇所からもわかるやうに、Gondラについては「いろいろ聞いてゐた」のであるから、ゲーテの詩なども当然、思ひうかんだとおもはれるが、それにしても、連れのリッターが浮かれてゐるのに反して、なぜ、とつさに、Gondラと死とを結びつけたのであつたか。

ヴェニスは「美と死」の町といはれる (E. Bertram: *Nietzsche*)。さらに、より具体的にいへば、それはトリスタンの町である。ワーグナーが、妻ミンナとヴェーゼンドク家とのイザコザから、『トリスタンとイゾルデ』の作曲を1じ中断して、スイスのチューリヒを出発、カール・リッターを伴つて、1とまづヴェニスにとゞまり、この町で、『トリスタン』の作曲をつゞけたのは、いつて見れば、偶発事件のせりである。ところが、これより約30年まへに、ブラーテン (A. Platen) といふ詩人が、「ヴェニスのソネット」と称する1連の詩を書いてをり、その中の1つ、「美しいものをこの目で見たものは、すでに死にとらはれてゐる」で始まる詩には、何と「トリスタン」といふ題が与へられてゐる。これは単なる暗合なのか、どうか。それとも、そこには、「隠れたる変数」がひそんでゐるのか。ベルトラムなどは、「ほとんど千里眼的」(fast hellseherisch) と云つてゐる。

同様に、偶然にして、偶然ならざる符号は、ワーグナーがGondラをはじめて見た時のイメージにも、あてはまる。Gondラを、柁、ないしは、霊柩車と見なして、ワーグナーは一瞬ぞつとしたといふが、まさに、25年ごに、ワーグナーの柁はGondラにのせられ、大運河をとほつて中央駅まで運ばれて、そこから特別列車で、パイロイトに向つた。ワーグナーの死因は、コレラでも、ペストでもなく、持病の心臓発作ではあつたが、すでにこのとき、ワーグナーは、「千里眼」を使つて、25年ごの自分の葬列の状景を、まざまざと見てゐたかの如くである。

ヴェニス「美と死」の町といふイメージに、『トリスタン』とワーグナーは2重の意味で加担してゐる。作品『トリスタンとイゾルデ』では、イゾルデが「美」であり、2人の愛の死が「死」をあらはしてゐるし、また『トリスタンとイゾルデ』といふオペラが「美」であるとすれば、作者ワーグナーの死がそれに対応してゐるのである。ワーグナーがヴェニスで死んでから、20年ごの1913年、それはまた、ワーグナー生誕からかぞへて、丁ど100年目にあたるのであるが、この年、トーマス・マンは『ヴェニスに死す』を書いて、ヴェニスの「美と死」の町の性格づけに駄目おしともいへる役割をはたしてゐる。

8月29日、ヴェニスに到着したワーグナーとリッターは、その日は、ホテル「ダニエリ」に宿泊。翌30日に、ワーグナーは、大運河に面したジュスティニアニ荘 (Palazzo Giustiniani) といふ広い建物を丸ごと借りて、うつり住み、午前は仕事、午後は散歩かゴンドラ乗り、食事はレストラン「サン・マルコ」でとり、夜はカール・リッターやこゝで知合つたロシアの侯爵ドルゴルキー (Fürst Dolgorukij) と共にすごした。

ワーグナーは、はじめ、こゝでブツダを主人公にした『勝利者』(*Die Sieger*)の草稿を拡大して、作品にしようかと考へたのであるが、それはうまく行かなかつた。ある眠られぬ夜であつた。明けがたの3時ごろ、ワーグナーはバルコニーに飛びだして行つた。昔から有名なゴンドラの舟唄を、はじめて聞いたからである。それは、2つの方向から、かけ合ひで唄はれるのであつたが、「しばしば、かなりの間隔をおいて、この奇妙に物悲しい掛け合ひは繰返へされた」(『わが生涯』, S. 592)。それから、ゴンドラの舟唄は、ワーグナーに幾度か感銘を与へ、『トリスタン』第3幕の冒頭に出てくる牧人のホルン(オーケストラではイングリッシュ・ホルン)の長く引きのばされたメロディーには(譜1)、ゴンドラの舟唄の哀調をおびた響きが反映してゐるであらう、とワーグナー自身も回想してゐる。

かうして、ワーグナーは、おそらくは、いまゝで述べて来たやうな意味で、ヴェニスといふ都市が、何よりも『トリスタン』にふさはしかつたから

譜 1



であらう、『勝利者』ではなく), 結局, この愛(美)と死のオペラを, ふたたび, 取りあげることになる. 9月3日, ワーグナーは, マチルデへの手紙形式の日記 (Venezianisches Tagebuch) に,

「こゝで, トリスタンは完成します——世間のあらゆる荒波と戦つて, そして, もしも出来ればの話ですが, それを持つて, あなたに会ひ, なぐさめ, 幸福にするために, 帰ります」

と, 書きつけてゐる. しかし, 実際に, ワーグナーが『トリスタン』に手をつけたのは, それから1ヶ月半たつた10月15日であり, 具体的には, 第2幕のオーケストラ・スケッチからであつた.

どうにか仕事は再開されたものゝ, いろいろの障害がワーグナーをわづらはす. 第1に, 肉体上の障害. 5年まへの53年9月, ジェノヴァで罹つた赤痢, ワーグナーのことばを借りれば, それ以来すつかりなじみのこの病気が, またこゝに来て姿をあらはしたし, さらに, ヴェニススの気候風土のために, 悪性のデキモノが脛にでき, はじめは, 大したこともないであらうと, 高をくゞつてかるく見てゐるところ, たちまち, 耐へられぬほどに痛みだし, 4週間も医者に通はねばならなかつた.

仕事をさまたげる第2の原因は, 政治的なものであつた. ヴェニススは, 1814年いらい, オーストリア領になつてゐた. たゞし, ドイツ連邦からはのぞかれてをり, そのために, ワーグナーは, ヴェニススは差支へなし, と判断したのである. ところが, オーストリアの警視總監ケンペン (Johann

Kempen von Fichtenstamm, 1793—1863) は、ワーグナーが 8月29日にヴェニスについたとの情報を手にいれるや、たゞちに、当地の警察に対し、「作家兼作曲家であるザクセンからの逃亡者ワーグナーは、ヴェニスに滞在するか。するならば、いかなるパスポートで、また、いかなる目的で？」と問合せてよこし、ワーグナーその人に間違ひないとの報告をうけると、この事実を、外務大臣ブオール=シャウエンシュタイン (Karl von Buol-Schauenstein, 1797—1865) につたへ、ドレスデン暴動の首謀者の 1人であるワーグナーが、わが帝国内に居住してゐることに対する警察の側からの心配は、しばらく措くとしても、ザクセン政府は、オーストリアがこの件を黙認するのをこゝろよく思はぬであらう、とワーグナーのヴェニスからの追放を進言した。

しかし、外務大臣ブオール伯爵は、この意見を、警察が容喙すべき問題ではないと、容れなかつた。ブオールにしてみれば、大国オーストリアが中小国の 1つに過ぎないザクセンに、そこまで気を使ふ必要はない、と判断したのである。たゞ、ドレスデン駐在のオーストリア代理公使をして、ザクセン政府に、ワーグナーはヴェニスにをり、6ヶ月ないし1年の滞在を希望してゐるが、オーストリア警察が嚴重に監視してゐる旨を事務的に報告させたゞけであつた。

ヴェニスの警察当局は、(本国の警視庁とはちがひ)、おそらくはワーグナーのオペラへの愛好のためであらうが、ワーグナーに対して、大へん好意的であり、警察参事官クレスピ (Angelo Crespi) は、9月5日、ウィーンの警視総監にあてゝ、前日4日のワーグナー滞在の短い報告について、やゝ長いコメントを書き送つてゐる。

「ワーグナーは、いはゆる未来の音楽の創始者として、音楽的・芸術的運動の最尖端に立つてゐるといふことは、よく知られてゐるところであります。ワーグナーのオペラ作品は、『ローエングリーン』が、近ごろ、ウィーンの宮廷オペラ劇場で、大好評のうちに上演されたのち、しだいしだいにドイツ中の大抵は宮廷劇場で、いつも変りない評価をえてをりますし、この作

曲家を認める数多くの声に事欠きません。

医師たちは、数年まへから、南の暖い地方への転地をすゝめてゐましたが、仕事熱心のあまり、それに耳を貸しませんでした。ところが、健康がおびやかされ、ぐづぐづしてゐると危険な状態になり、精神的にも、肉体的にも、ぜひ、休養が必要となりましたので、たうとう、ヴェニスに、しばらくのあひだ、滞在したいと思立つたのでありまして、当地では病人らしく生活してをり、他との交際は一切避けて居ります……」(W. Lippert: *R. Wagners Verbannung und Rückkehr*, S.100)

クレスピのこの配慮がなかつたら、ワーグナーはヴェニスで『トリスタン』の作曲をつづけられなかつたであらうから、後世のワーグナー愛好者は、この警察参事官に感謝しなければならぬ、といふのが、アーネスト・ニューマンの意見であるが (E. Newman, *Wagner II*, S.563), それは、とりもなほさずヴェニスは『トリスタン』作曲のために、他のどこよりも、ふさはしい土地であつたと云つてゐるとも、とれなくもない。

ワーグナーを取りまく環境は、かういふやうに、必ずしも快適とはいへなかつたけれども、『トリスタン』の作曲は、とにかくも、すゝめられた。その間、ワーグナーは、ずつと、例のマティルデへの手紙形式の日記を書きつづける。それは、『トリスタン』の仕事をするためには、必須のことだつたと思はれる。ワーグナーは、マティルデへの思ひを、彼女に擬似手紙を書くことによつて、さらに燃え上らせ、そして、定着させ、それを原動力として、作品の製作にいそしんだのである。

わたしたちは、幸ひにも、この日記が残つてゐるために、『トリスタン』の進捗状況もわかるし、また、それは、作品『トリスタン』へのコメントにもなつてをり、このオペラの理解を助けてくれる。たとへば、

「今日、ヴィレさん(エリーザ・ヴィレ)から手紙が来ました。あなたのことについての初めての知らせです。あなたは、落ちついて、冷静に、諦めに徹する覚悟ださうですね! 親、子供たち——義務、……あなたを思ふと、わたしには、親も、子供たちも、義務も、意識から飛んで了ひます。わたし

には分つてゐます。たゞ、あなたが私を愛してゐるといふことゝ、この世の
気高いものは全て不幸であらねばならぬといふこと、が、……」(9月5日)

そして、12月8日には、

「昨日から、再び、トリスタンに取り組んでゐます。まだ、不相変、第2
幕です。しかし、——これは、どういふ音楽だ！ わたしは一生涯なほ、こ
の音楽に手を加へて行くことも出来るでせう。……これまでに、このやうな
ものを創つたことはありません。とにかく、この音楽にすっかり溶込んでゐ
るのです。これが、いつ、完成するにせよ、もはや、これについては何も聞
きたくありません。わたしは、この音楽の中に永遠に生きるのです」

ワーグナーのこのやうな告白は、何度も繰返すやうに、それはマティルデ
への手紙のかたちをとつてはゐるものゝ、実際には、マティルデの手にとゞ
けられたのではなく、たゞ、ワーグナーにしてみれば、書く行為それ自体に
意味があつたのである。ところで、1度だけ、ワーグナーはマティルデに本
当に手紙を送つたが、それは開封されぬまゝ、返送されて来た(9月2日)。
しかし、これをもつて、マティルデ、ないしは、ヴェーゼンドンク家とワー
グナーが絶交状態だつたと思込むのは早計である。

(1858年)10月13日には、ヴェーゼンドンク夫妻の次男グイード(Guido)
が死に、その死亡通知が、ワーグナーの許にとゞいてゐる。オットー・ヴェ
ーゼンドンクとマティルデは、1848年に結婚、49年に長男が生れたが、4ケ
月で死亡してゐる。グイードは、その次の子で、55年9月13日の生れであ
る。55年といへば、ワーグナーは、前年54年には、『ワルキューレ』第1幕
の作曲をすゝめながら、合計16の暗号化した略号を楽符の余白に書込み、マ
ティルデへの愛を告白してゐるし、『改訂ファウスト序曲』に、「愛する女友
だちのために」といふ献辞をそへたのは、55年1月であつたから、ワーグナ
ーとマティルデのあひだは、もう可成り親密になつてゐたころにあたる。

ワーグナーは、この子グイードについては、すこし特別の記憶をもつてゐ
る。ヴェーゼンドンク夫妻が、ワーグナーに、夭折した長男のあと6年目に
やつと生れた息子グイードの代父になつてもらひたい、と希つたのである

が、ワーグナーは、この子に不幸をもたらすかもしれない、といふ口実のもとに、この申出をことわつた経緯がある。

年をこえると（59年）、ヴェーゼンドンク家とワーグナーのあひだは、さらに修復され、1月19日からは、ワーグナーのマティルデあての手紙もとゞくやうになり、『トリスタン』の第2幕のオーケストラ・スケッチがすんだ3月10日には、

「やつと、わたしは昨日、大きな（音楽上の）難問であり、誰にとつても分りにくい第2幕を、へました。いま、でになかつたやうな仕方、この課題を解決したと思つてをります。これは、わたしのこれまでの芸術の最高峰です」

と書送つてゐる。

ヴェニス警察の配慮のおかげで、ワーグナーは、ヴェニスに居留が、可能だつたのであるが、59年2月になると、ウィーンの警視総監は、つひに、ワーグナーのヴェニスからの退去を指示して来た。

これについて、ワーグナーは、『わが生涯』の中に、つぎのやうに述べてゐる。

「それより少しまへ、わたしは警察に丁重に呼出され、率直に知らされたところによると、オーストリア領内に私が滞在してゐることに対して、ウィーンのザクセン大使館から、たえず、つつかれてゐるといふのである。たゞ、春が来るまで滞在を延ばしただけだと云ふと、医者診断書を見せ、健康上の理由からといつて、そのころ、ミラノに総督として駐在したマキシミリアン大公にたのみ、その許可を得ては、と教へられた。私がこれを実行すると、大公は、たゞちに、ヴェニス当局に電報で、私をそつとしておくやうに、と指示された」（S. 596）

しかし、政治的な緊張はますます高まり、他国人に対する監視も厳しさをまして行つた。ワーグナーは戦鬪が間近かなのを察知し、それにまきこまれぬやうにと、ヴェニスを引払つて（3月24日）、イタリアのミラノに向つた。（カール・リッターはイタリアにとゞまり、フィレンツェからローマへ足を

のばした。)

1850年代、イタリアがかゝへる最大の課題は、祖国の統一であつた。52年、サルデニア王国の首相となつたカヴール (C. B. Cavour) は、サルデニアを盟主としたイタリアの統一をはかつたが、オーストリア領となつてゐるロンバルディアとヴェニスとが、その際の大きな障害となつた。カヴールはサルデニア王家の故郷であるサヴォイとニースを割譲するとの条件で、フランス (ナポレオン 3 世) と手を組み、オーストリアとの開戦にふみ切つた。それは、59年 4 月 29 日であり、ワーグナーのヴェニス出発から 1 ヶ月しか経つてゐない。49年のドレスデン暴動のときの行動といひ、今度といひ、ワーグナーの状況判断の正しさを示してゐるであらう。

サルデニア・フランス軍は、マジェンタやソルフェリーノで勝利をさめたが (6 月 4 日および 6 月 24 日)、サルデニアの強大化をおそれたナポレオン 3 世が、とつぜん、オーストリアと単独で休戦し、ヴィラフランカ条約をむすび (59年 7 月 11 日)、ロンバルディアだけは、サルデニアとの併合を認めたものゝ、ヴェニスはオーストリア領のままとしたのである。

この戦争は、ワーグナーにとつて、ヴェニス滞在をやゝ縮小したゞけにすぎないやうに見えるが、そればかりでなく、2 年ごの『タンホイザー』スキヤンダルにまで尾を引いてゐるといふ見方もある。

1861年 3 月 13 日は、ワーグナーには、忘れられない日の 1 つである。この日、皇帝ナポレオン 3 世の命令のもとに、『タンホイザー』が、パリのオペラ座で上演されたのであるが、フランス貴族の親睦会であるジョッキークラブの会員数名が、しめし合せておいて、とつぜん、バカ笑ひをして、この舞台を妨害した。間もなく、この事件をめぐつて、出来過ぎたやうな噂がひろまつた。それは、『タンホイザー』のパリ・オペラ座での上演は、先にふれたヴィラフランカ条約の秘密条項に入つてゐたといふのである。ワーグナーはドレスデン暴動にも参加した政治的危険人物であり、そのオペラを、芸術の都であるパリの、それも最も権威あるオペラ座で、物笑ひの種にするのが、オーストリア側の意向だつた、と理由づけられてゐるのであるが、真偽

はともかく、さうした風評があつたのは、事実であり、ワーグナーとイタリア統一戦争との関係は、意外に、ふかい。

(2)

(1859年) 3月25日、ワーグナーはミラノでレオナルドの「最後の晩餐」を見、夜はスカラ座に行つてゐるが、その日のだし物は新進作曲家のつまらないオペラだつた、と云つてゐる。ワーグナーは、こゝからマティルデにあてゝ、

「ヴェニスには、すでに、お伽話の中の夢のやうに思へます。——わたしがそこで音にしておいた夢を、いつか聞いてみて下さい」と、書いてゐる。このことばからも、ヴェニスが『トリスタン』第2幕を作曲するのに、打つつけの場所だつたことがわかる。

26日には、ミラノをたち、コモ、ルガノをとほつて、ゴットハルト峠をこえ、3月28日に、(スイスの)ルツェルンに入り、ホテル「シュヴァイツァー・ホーフ」に宿泊。寒くて、雨の日が続き、天候はあいにくだつたが、幸ひにも、このホテルは夏の避暑用のものであり、いまは全館ガラ空きであるから、別館全部をワーグナーが使つてもよい、といふので、しばらくのあひだ、こゝに落ちついた。こゝに着いて、4日目の4月2日には、チューリヒに行き、ヴェーゼンドク家を訪れてゐる。去年の8月17日、「かくれ家」を出てから、やく8ヶ月ぶりの訪問であつた。再会は「重い気分」だつたが、しかし、「何のこたはりもなく」と、ワーグナーは云つてゐる(『わが生涯』, S. 600)。ルツェルンにゐるあひだに、なほ何度か、ワーグナーはヴェーゼンドク家をたづね、ヴェーゼンドク夫妻もまた、ワーグナーの誕生日(46歳)をふくめて2回ルツェルンにやつて来て、ワーグナーの訪問にお返しをしてゐる。かうして、ワーグナーとヴェーゼンドク家との関係は、一応、元にもどり、以後この関係はワーグナーの死までつゞく。

ヴェニスからの荷物——1ばん大事なのは、ピアノであつたが、それもとゞき、ワーグナーが仕事を再開したのは、4月9日である。いよいよ『トリスタン』第3幕の作曲である。おそらく、それから数日ごと思はれるが（日附がないので分らない）、マティルデへの手紙に、

「このトリスタンは、何か恐しいものになります！ この最終幕は！……まづい上演によつて全体がパロディ化されなければ、このオペラは禁止になるのではないかと心配します。——たゞ、まあまあの上演だけが、わたしを救つてくれる！ 完全によい上演は、人々を狂気にするに違ひありません。——わたしはさう思はざるをえないのです」と、書いてゐる。ボードレールは、ワーグナーの芸術を評して、私たちを、「重さの絆から解き放つ」と云つたが（「ワーグナーと『タンホイザー』のバリ公演」）、日常の規範（重さ）から解放された人々は、いはゞ「狂気の人」である。事実、ワーグナー愛好者の代表的人々の何人かは、狂気に落込んだ。ニーチェがさうであり、ルートヴィヒ2世がさうであり、三島由紀夫もまた、その例に入れていゝかもしれない。かうしたワーグナーのオペラの中でも、最も私たちを狂気に誘つてやまぬのは、作者ワーグナーも気づいてゐるやうに、何といつても、この『トリスタン』であらう。

このころ、ワーグナーは腹の具合がよくなく、キッシンガー水をのみ、朝の散歩が疲れて、仕事にも支障をきたすため、ホテルの馬を借りて、それに乗つて散歩してゐる。さうした状態だつたので、仕事の方は、あまりはかどらず、4月、5月そして6月の半ばまで来て、第3幕の半分にもならなかつた。たゞそのあひだに、6月7日、リギ山に登つたワーグナーは、アルプス・ホルンの音を聞き、『トリスタン』第3幕の最終場、イゾルデの船がやつて来るのを知らせる（この幕の冒頭の哀調をおびたものゝ対となつてゐる）陽気なメロディー（譜2）へのヒントを擱んでゐる。さうしてゐるうちに、ホテルが宿泊客で立込むシーズンになり、ワーグナーはそれまで使つてゐた別館をあけわたして、本館の3階の部屋に移つた。天候はよくなり、爽やかな晴天の日がゞき、8月はじめには、大体の作曲がをはつた。

譜 2



ルツェルンでは、ホテル住まひだつたし、仕事も一段落したので、ワーグナーは次の落ちつく場所をさがし始めた。いろいろ考へたすゑ、リストからのすゝめもあつて、ワーグナーは行先をパリと決定した。「何ものにも妨げられずに住めるのは、パリであり、そこ以外のどこにも、生々とした芸術家の生活を十分に享受出来るところはない、と私は確信した」(『わが生涯』, S. 604)

(1859年) 9月6日、ワーグナーはルツェルンを出発、まづチューリヒに行き、ヴェーゼンドンク家をたづね、そこに3日滞在、ヘルヴェーク、(『緑のハインリヒ』の作者)ケラー、ゼンパーなどに会つてゐる。いづれも、ワーグナーのチューリヒ時代、ヴィレ夫妻のサロンに顔を出してゐた人々である。ワーグナーは、パリに行つてからの生活費も工面しなければならず、こゝで、ヴェーゼンドンクに『指環』のスコアの版權を各篇6000フランで売つて、何とかその方面の解決をみた。『ラインの黄金』と『ワルキューレ』の分は11月2日に、未完成の『ジークフリート』の分は11月7日に、そして、翌60年2月1日には、『神々のたそがれ』の分まで、結局、ヴェーゼンドンクは、ワーグナーに、合計2万4000フラン渡したのである。

ワーグナーが、パリに到着したのは、9月11日か、12日と思はれる。15日には、Avenue de Matignon Nr. 4 に部屋をかり、10月2日には、別居してドレスデンにゐる妻ミンナへの手紙には、「大きな成功を期待してもいいやうに思へます」と書いてゐる。

ワーグナーは、いつもパリに「大きな期待」をもつて行つてゐる。20年まへの最初のパリ行きが、さうであつたし、今度もまた…… それにワーグナーは、正確に10年ごとにパリに住むはめになるのも、奇妙である。第1回目

が1839年、第2回目は、49年のドレスデン暴動からの逃亡先としてのパリであつたが、この時はコレラ騒動のため、たつた8日間の滞在に過ぎなかつたけれども。そして、3回目が59年の今度である。

10月20日には、Rue Newton Nr. 16 に引越した。これは小さな庭のある「あづま屋」風 (pavillonartig) の家で、家賃は年4000フランであつた。(この数字から、ヴェーゼンドンクに売つた版權の代金、1篇6000フランの価値が、どれくらゐるかゝわかる。) そのころ、最新作『トリスタン』の上演が、あるいは可能かと、はかない希望を托してゐたカールスルーエから連絡が入り、トリスタンを歌ふテノール歌手が見つからないから、上演出来ない、と云つて来た。パリ到着1ヶ月半にして早くも味はつた挫折の第1弾である。

ワーグナーと妻ミンナとが、チューリヒのヴェーゼンドンク家の離れである「かくれ家」から、あのやうにして、1人はヴェニスへ、1人は故郷のドレスデンへ、わかれわかれになつて暮して、1年以上がたつてゐた。ワーグナーは、もう1度、ミンナーと一緒に生活したいと、まへまへから思つてゐたのであるが、丁どいゝ時期とおもひ、ミンナにその旨を伝えてやつた。

11月17日、ミンナは犬と鸚鵡をつれて、パリにやつて来た。ワーグナーの友人で、ドレスデンの医師プジネリ (Anton Pusinelli, 1815—1873) の診断によれば、ミンナの病状は、心臓疾患であり、不整脈、呼吸困難が認められ、顔色がわるく、表情に落ちつきがない、とされてゐる。これは肉体的な病気にくはへ、家庭内の不和も、大きく影響してゐたであらう。ワーグナーは、ミンナの「妹」(と云つてゐた、彼女の未婚時代の娘) も一緒にでもよい、と云つてやつたが、このナターリエは、ついて来なかつた。

ニュートン通りの家で、ワーグナーは女中と下僕までやつて、ミンナを呼びよせたのである。それは、病気のミンナの家事の負担を少しでもかるくしようといふためであつた。ところが、ミンナには、この贅沢が気に入らなかつた。ワーグナーがやつておいた使用人も気があはず、間もなく、この2人には暇をだしてさび、自分がつれて来たシュワーベン生れの女中だけ

を残した。1年3ヶ月ぶりの共同生活であつたが、再開早々から、それは波瀾ぶくみだつたのである。

12月、出版社のショット社 (Schott) とのあひだに、『ラインの黄金』のスコアの版權を、1万フランで売りわたす契約が成立。しかし、ワーグナーは、すでに、ヴェーゼンドルクに、この曲を6000フランで売つてをり、ヴェーゼンドルクには、その額を返金することにした。ワーグナーは、このショット社からの金で、音楽会をひらき、パリでの成功の手がかりを掴まうとしたのである。

明けて、1860年、1月21日、ワーグナーは、『トリスタン』の総譜を、ベルリオーズに送つてゐる。ベルリオーズこそ、自分の新しい音楽を理解してくれる人、と思つたからである。しかし、そのベルリオーズにも、『トリスタン』音楽の斬新さは、理解出来なかつた。まして、ワーグナー・コンサートの練習をしてゐた演奏家たちにおいては、いふまでもない。この音楽会のプログラムに入つてゐた『トリスタン』前奏曲について、ワーグナーは、かう云つてゐる。

「この小さな前奏曲は、楽団員たちにとつて、理解出来ないほど、新しかつたので、暗い穴で宝石をさがすやうに、この人たちに、1音々々教へてやらねばなりませんでした」(60年1月28日、マティルデアて書簡)

ワーグナー・コンサートは3夜おこなはれ、第1回目は、1月25日であつた。会場はイタリア劇場、出しものは、『タンホイザー』と『オランダ人』の序曲、『ローエン格林』からの抜萃曲、そして、『トリスタン』前奏曲などであり、ワーグナーが全部、暗譜で指揮したのが、まづ、皆をおどろかした。新聞での評判は、概して、よくなかつた。中には、「ワーグナーは、メロディもなく、リズムもなく、形式もない音楽を作る」と書いたのもあつた (Gregor-Dellin, *R. Wagner*, S. 460)。新聞で一斉に非難されたのは、ワーグナーが、ジャーナリズム関係者に招待状を送らなかつた、めの反感からであつたとも云はれてゐる。ワーグナーは先にロンドンに演奏旅行したをりにも、音楽担当の記者に挨拶しておくやうにと注意されたにもかゝらはら

ず、それをことわつてをり、今度もまた、新聞記者に膝を屈しなかつた結果である。

2月7日には、ベルリオーズの批評が、「ジュルナル・デ・デバ」誌に発表された。その中で、ベルリオーズは、『タンホイザー』や『ローエングリン』からの曲はほめたが、例の『トリスタン』前奏曲については、「この奇妙な作品のスコアは、何度も読み、この曲の意味を知らうと、細心の注意をもつて聴いてみたのであるが、正直のところ、作曲者がこれで何を意図したかを掴むことは出来なかつた」と書いてゐる。

演奏会は、第2回目が、2月1日に、第3回目は、2月8日に行はれ、都合3回でをはつたのであるが、楽屋裏の収支は、1万1000フランの欠損であつた。

しかし、ワーグナーのこの試みは、失敗だつたかといへば、さうではなかつた。あるいは、大成功とさへ云へるかもしれない。それは、新聞での評が、芳しくなかつたにもかゝらず、これを機会に、パリの知識人のあひだに、一種のワーグナー熱とでも云ふべき風潮が芽生えたからである。フランス語には、*wagnérisme* といふ言葉があるが、その発生は、じつに、この3回のコンサートにあつた。

ワーグナー熱に冒されたのが、どのやうな人たちだつたかも、興味がある。それは、まづ、作家や詩人、そして画家などであつた。ワーグナーが、シェーンベルク、ブルックナーなどの大家をふくめて、後代の音楽家に与へた影響は、いふまでもなく、大へんに大きい。しかし、最初に、ワーグナーを認め、ワグネリズムを興したのは、どちらかといへば、音楽家は少なく、むしろ文学や絵画の方面——とくに、文学者たちが多かつた。このやうに音楽だけの狭い領域をこえて、他の芸術の分野にも影響を与へたからこそ、ワグネリズムなのかもしれない。*mozartisme* や *beethovénisme* がなく、*wagnérisme* がある理由である。

1860年1月から2月にかけての演奏会でも、まづ、感激したのは、小説家ジャンフルリ (Jules Husson Champfeury, 1821—89) であり、そして、

医者で、音楽愛好家であるガスペリーニ (A. d. Gaspérini) であつたが、中でも、特筆すべきは、ボードレールである。このフランス象徴派の大詩人は、2月17日、ワーグナーに手紙を送つて、その音楽が自分のための音楽であるやうな気がしたと云ひ、「貴下は小生を本来の自分へと つれもどしてくれた」と、賞讃してゐる。

このコンサートで、『トリスタン』前奏曲は、ベルリオーズにきへ分らなかつたのであるが、それも、2回、3回と回を重ねるにしたがつて、このばあひもまた、むしろ(音楽の)「素人」から、しだいに理解されて行き、3回目の演奏がをはつたときには、それまでになく、拍手が多かつたと云ふ。

パリでの家庭生活の方は、どうであつたか。ミンナとの生活は、やはり、うまく行かなかつた。このころ、毎週水曜日の夜に、ワーグナー家では、サロンが開かれてゐた。常連の顔ぶれは、作家のシャンフルリや画家のギュスターヴ・ドレ (Gustave Doré, 1832—83) などのほかに、このパリ時代以後しばしばワーグナー家に入出入して、私たちに、ワーグナーに関する資料を残してくれたマルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク (Malwida von Meysenbug, 1816—1903)、それから、リストの娘で、コージマの姉であり、フランス人の法律家エミル・オリヴィエ (Emile Ollivier) と結婚してゐるブランディーネ (Brandine, 1835—62) といふやうな人々であつた。ワーグナーとブランディーネは、よく冗談口をきゝ合ふ間柄であつたが、ミンナが彼女に嫉妬した。それは、ミンナの一方的な勘ぐりとはばかりはいへないのであつて、ワーグナーとブランディーネとの関係は、人々の噂にのぼつたりもしたのである。

3月半ば、皇帝ナポレオン3世の口添で、『タンホイザー』がオペラ座の舞台にかゝることになつた。ワーグナーの喜びは大きかつた。しかし、いよいよ実現してみると、例の『タンホイザー』騒動となるのであるが、それは、まだ10ヶ月先の話である。この間、ワーグナーは、ブリュッセルに行き、2回コンサートを開き(3月24日と28日)、自ら指揮してゐる。そのほかには、オペラ座の『タンホイザー』のために、台本の(フランス語への)翻訳交渉

や今日一般にこのオペラのパリ版と称するヴェヌス山の場の改訂拡大に精を出してゐた。

7月はじめ、ミンナは湯治のために、フランクフルトの近くのバート・ゾーデン (Bad Soden) に行つてゐる。この温泉は、気管の病気や喘息、心臓病などに効目があるさうであるから、ミンナの病気には、うつてつけの場所であつたと思はれる。7月22日、ワーグナーには嬉しい知らせが入つて来た。パリ駐在ザクセン公使、ゼーバハ男爵 (Albin Leo von Seebach, 1811—84) が伝へるところによると、7月15日附で、ワーグナーに対して、特赦がおこなはれ、ザクセンをのぞく、ドイツ各国への入国が許可された。8月12日、ワーグナーは11年ぶりにドイツに入り、ミンナの保養してゐるバート・ゾーデンに行つた。翌日、ワーグナー夫妻は、フランクフルトに兄アルベルト (Abert Wagner, 1799—1874) をたづねてゐる。

10月には、ワーグナーの住んでゐた家が、道路拡張のために、取壊しになるので、別のところに引越。まもなく、「チフス性の熱」(『わが生涯』) に冒され、オペラ座のための『タイホイザー』の練習は、一じ、頓挫したが、それも約3週間ごには、なんとか、再開された。

1861年といふ年は、ワーグナーには、何よりも第1に、『タンホイザー』事件の年である。164回のリハーサルのうち、『タンホイザー』は、3月13日、18日、25日の3回、オペラ座で上演されただけで、ワーグナーは以後の公演を打切つて了つた。

ワーグナーの生涯は、一見、挫折の連続のやうにも見える。自作のオペラを、どこでもいゝから、とにかく上演したいと八方手をつくすが、大抵はことわられる。ワーグナーより前の世代、モーツァルトやベートーヴェンの時代には、芸術——とくに、音楽の中心地はウィーンであつたが、ワーグナーの時代、19世紀では、それはパリであつた。パリで認められるのは、ヨーロッパで——当時の人々の意識からすれば、世界での「一流」の仲間入りを意味する。ワーグナーも、そのパりに、2度、3度と挑戦するのであるが、その度ごとに拒絶される。しかし、ワーグナーの一生は、挫折の外観の下に、よ

く見ると、透し模様となつて「成功」が、くつきりと浮びあがつて来る。借金取りからののがれて、うまく、リガからも脱出できたし、ドレスデン暴動の際にも、逮捕されずにすんだ。そればかりでない。新聞などでは、多く悪評だつたにもかゝらず、まだ数は少ないが、強力な支援者、共鳴者、崇拜者がゐる、確実にふえてゐる。今度のばあひも、このやうなスキャンダルに遭つたのは、生涯の汚点だつたかといふと、必ずしも、さうではない。むしろ、ワーグナーにとつて、プラスに働いたときへ云へる。この事件のおかげで、ドイツでは、人々が急にワーグナーに関心をもつやうになつたのである。バーデン国のフリードリヒ大公も、さうした中の1人であつた。大公は、『トリスタン』を首都カールスルーエで上演出来ないものか、と考へた。まへにも1度（この作品完成直後の59年）、『トリスタン』をこの町で、といふ話があつたのであり、これで2度目の可能性である。ワーグナーは、早速、カールスルーエにむかひ、大公夫妻に面会した。劇場監督のはなしによると、今度もまた、前回同様、今こゝには力のあるソリストがゐないといふのが、最大の難点であつた。ワーグナーは、ひとまづ、パリに引上げたが、歌手を自分で探してみようと思ひたち、5月9日、ウィーンへ赴いた。

ウィーンでは、もう、ワーグナーはかなりよく名まへが売れてゐた。丁ど、宮廷オペラ劇場のレパートリーに、『ローエングリン』が入つてゐた折だつたので、5月11日、ワーグナーは練習を見に行つてゐる。完成して13年、リストによつて、ワイマルで初演されてから11年目にして、ワーグナーは、はじめて、自分のこの作品を見たのである。ワーグナーは舞台のうへの椅子に腰かけたまゝ、じつと、身じろぎもせず、見つめてゐたが、をはつた時には、感激のあまり、立つてゐられなかつた程であつたと云はれる。5月15日には、このオペラの公演に招待されたのであるが、幕間ごとに、満場の拍手によつて、作者ワーグナーは舞台のうへに呼び出された。全曲がをはつたときには、会場をゆるがすばかりの拍手となり、ワーグナーは棧敷から短いお礼の挨拶までしてゐる。

ワーグナーは劇場監督に、この歌手たちを、カールスルーエに貸してもら

ひたいと頼んだが、監督は色よい返事をしなかつた。それで、ワーグナーは、それならいつそ、ウィーンで『トリスタン』を、と思ふやうになつた。その実現への可能性の感触もある程度つかんだので、またもカールスルーエに行き、バーデン大公に会つて、こゝでの『トリスタン』上演のむづかしさについて伝えてゐる。

ワーグナーは、近いうちにパリを離れる決心をした。しかし、次の定住地は、まだ、決つてゐない。とりあへず、ミンナは昨年同様、バート・ゾーデンへ湯治に行き、ワーグナーは、いよいよウィーンで『トリスタン』の練習がはじまるので、そちらへ行くことにした。このとき、「なやみ」の1つは、飼ひ犬の運搬であつた。ところが、さうかうして、出発間ちかのある日、ミンナが犬のフィプス (Fips) をつれて散歩に出た途中、犬は路上にあつた何かの毒物に当たつたらしく、急に様子がをかしくなり、はげしい息づかひをした。犬は、夜になつて、ミンナのベットの下で死んだ。ワーグナーは、この犬の死について、「動物は、子供のゐない私たちの共同生活には、特に大事なもの」であり、「この元気な、可愛らしい動物の突然の死は、すでに不可能になつて了つた共同生活の中へ、決定的な亀裂のやうに入つて来た」と云つてゐる (『わが生涯』, S. 663)。

7月11日、ミンナはバート・ゾーデンへ保養に出かけ、月末、ワーグナーもそこに行つたが、8月1日には、ミンナがワーグナーをフランクフルトまで送つて来て、ワーグナーは、さらに、ワイマルにむかひ、ミンナは一旦ゾーデンへ引返したのち、しばらく、ドレスデンに住むことになつた。

ワーグナーは、ワイマルで、リストに会い、そのあと、リストの娘のブランディーネ夫妻と、バイエルン=アルプスのバート・ライヘンハル (Bad Reichenhall) に、産後の保養をしてゐたコージマを見舞つてゐる²⁾。8月14日、ウィーン到着。ところが、何と、『トリスタン』の練習は中断してゐた。理由は、トリスタンを歌ふ予定のテノール歌手アンダー (Alois Ander) が、風邪がもとで声が出なくなり、治療中であるといふのである。劇場監督 (Indendant) や支配人 (Direktor) に³⁾、練習は、いつ、再開されるかと

訊いても、はつきりした返事がかへつて来ない。ワーグナーは、ほかのテノール歌手に当つてみたが、それも埒があかない。困りはてたワーグナーは、ドレスデンのミンナにあて、長い長い手紙を書いて、自分の窮状を訴へてゐる。

「この惨めさを、一緒に荷つて下さい。私の状況をよく見て、私がほとんど押しつぶされさうになつてゐるすさまじいばかりの苦勞と心配とを察して下さい。……私の古いオペラはいろいろのところで上演されてゐますが、新しい作品は、ほとんど、どうしようもない困難に逢着してゐます。私はこれらの新しい仕事で、今日の時代と現在の劇場の能力よりも、はるかに——はるかに前にすゝみすぎました。すでに、カールスルーエでの『トリスタン』も駄目になりました。私の反対者たちは他人の不幸をよろこんで、かう云ひふらしてゐます、あれは彼の最高の作品だが、しかし、上演不可能だ、と。私はウィーンに来ました。アンダーは病気です。そして、結局、この冬は、とてもこの男は当てに出来ないことが分つたのです。この運のわるさは、私のオペラを舞台に上せないための理由に利用されてゐるのです。……」(10月19日)

歌手アンダーの病気は、ワーグナーがいふとほり、たしかに、『トリスタン』上演延期のための口実に利用された。ずるずると引きのばされたうへ、結局は、上演とりやめとなるのであるが、劇場が一旦上演計画を立て、おきながら、途中から、その実現をしぶり出し、そして中止にしたのは、どういふ事情だつたか。何と云つても、それは第1に、歌手が歌ひにくいといふ問題であつた。歌ひにくい、といふのは、音楽上の技術的なむづかしさもあるにはあつたが、それよりも、歌手たちが自分の役割を十分に擱めなかつたのである。ワーグナーが、「今日の時代と現在の舞台の能力よりも、はるかに——はるかに前にすゝみすぎた」と云つてゐるのは、そのところを差してゐるであらう。

パリのオペラ座での『タンホイザー』は、あのやうな騒動をおこすし、バーデン大公を頼つてのカールスルーエでの『トリスタン』上演も陽の目をみ

なかつたし、今度こそはと思つたウィーンでの『トリスタン』も、77回も練習を重ねたすゑ、またまた、オジャンになつて了ふのである。もつとも、上演中止が決定したのは、2年ごの1863年3月であり、ウィーンからのその知らせを、ワーグナーは演奏旅行中のモスクワで受けとつてゐる。

(3)

ワーグナーは、失意の中で、次の作品、『マイスタージンガー』にむかふ。このやうなときに、仕事をする以外、一体、ほかに何があるであらうか。それに、このオペラは、楽しい、愉快的な題材を取りあつてゐる。このやうな創作に没頭すれば、気もちも晴れやうといふものである。さうしてゐるうちに、11月早々、ヴェーゼンドク夫妻が、ヴェニスにワーグナーを招待した。ワーグナーは、こゝで、マティルデに『マイスタージンガー』の第1草稿をあづけておいたが、あれを戻してもらひたいと云つた。ワーグナーが、ヴェニスにゐたのは、11月6日から11日まで、あるが、このあひだに、ティツィアーノの絵画「マリアの昇天」⁴⁾を見て、『マイスタージンガー』を完成させようと決心してゐる（『わが生涯』, S. 684）。この絵と『マイスタージンガー』が、どういふ関係にあるかは問題であつて、強ひて、類縁性をさがさうとする人々もゐるし、また、2つのあひだには、特別の因果関係は存しないが、インスピレーションを与へるとは、さうしたものだ、とする見方もある。目の人と耳の人とに分けると、ワーグナーは、いふまでもなく、耳の人であり、絵画とはあまり接触がなかつたやうに思へるが、ミラノではレオナルドの「最後の晩餐」を見てゐるし、そのほかにも、ファン・ダイクの「幼児キリストの前の聖アントニウス」とクレスピ（Daniele Crespi, 1590—1630）の「ステファンヌの殉難」に感歎してをり、予想以上に、美術にも興味をもつてゐたのかもしれない。

ワーグナーは、ヴェニスに1週間ほどゐて、ウィーンにかへる汽車の中で、『マイスタージンガー』の前奏曲の主要部分が思ひついたと云つてゐる。

元気づいたワーグナーは、ウィーンにつくと、さつそく、マイスタージンガーについて調べはじめ、グリムやワーゲンザイル (Johann Christoph Wagenseil, 1633—1705) の著書³⁾によつて、「マイスター歌」(Meistergesang) の概要に通じた。これらの本を読んでみて、はじめて、ワーグナーは、自分がその方面に、いかにうとかつたかを思ひ知らされた。今日、わたしたちは、ワーグナーのこのオペラのおかげで、「マイスター歌」が、いかなるものであつたかを、手つ取りばやく、知ることが出来る。ワーグナーは詩作するに当つて、かういふ風に、資料を漁り、確実な史実をふまへてゐる。『ローエングリーン』や『マイスタージンガー』は、歴史劇の側面も有つてゐるのであり、そこどころにも、また、1つの価値が認められる。

「マイスター歌」といふのは、14世紀から17世紀にかけてドイツ各地で盛んだつた詩歌である。作者は職人の親方 (Meister)、つまり、Meistersinger (親方歌手) であり、形式は、1時代まへの宮廷詩人の歌である「恋愛歌」(Minnesang) にもとづき、煩瑣な規則にしたがつて作られた。「マイスター歌」は「恋愛歌」の職人版であり、わが国の連歌から連句への推移に、ある程度平行すると見ても、あまり勝手な類推とばかりは云はれまいと思ふ。

ワーグナーは改めて、『マイスタージンガー』の散文章稿にとりかゝつた。第1稿は、45年の7月16日、マリーエンバートで書き、マティルデに渡したものがあつた。今度のが第2稿になるのであるが、それを11月14日から16日くらのあひだに、ホテル「皇后エリーザベト」で書いたと思はれる。第1稿では、ワルターもエーファも、まだ名まへが決らず、若い男、少女となつてをり、第2稿でも、まだ、コンラートとエンマとなつてゐる。この第2稿の末尾には、「マイスター歌」の作歌規則 (Tabulatur) までメモしてあり、ワーグナーの勉強のほどがしのばれる。ワーグナーは、これを書き上げるとすぐに、もう1度稿を練りなほして、第3稿をつくり (11月18日)、これをマインツの音楽出版社のショット社に、11月20日に、おくつてゐる。かういふものをオペラにしたいと思つてゐるが、出来上つたら、それを買ひとつて

くれるか、どうか、打診するためである。製作の予定日時は、無謀とまでは行かなくとも、大胆だつた。翌62年1月1日までに台本完成、3月すゑまでに第1幕の、6月までに第2幕の、9月までに第3幕の、それぞれ総譜を仕上げるといふのである。

ワーグナーは、11月30日、ウィーンを発ち、パリにむかつた。途中、メインツに立ちよつて、12月3日、ショット社の社員や招待客をまへに、『マイスタージンガー』の草稿を朗読、ショットは1万フランの前払ひを承諾した。たゞし、この金は『マイスタージンガー』完成のためだけに使ひ、約束の期日厳守といふのが、条件であつた。

ワーグナーがまだウィーンにゐた11月24日は、ワーグナー夫妻の結婚満25年目の日であり、銀婚式に当る。ワーグナーは、この日、ドレスデンのミンナに金の腕輪を贈つてゐる。2人の間柄は、もはや、決定的といへるほどに、はなればなれになつてゐたけれども、このころでもなほ、しかし、ワーグナーはミンナにあてゝ、嬉しいことも、苦しいことも、こまごまと知らせてゐる。たとへば、ウィーンで、『ローエングリーン』が喝采を受けたこと（5月16日）、同じウィーンで、望みを托した『トリスタン』公演が無期延期となり、すつかり世間から見離されて了つたこと（10月19日）、など。2人は別々に住んで、手紙のやり取りでなら、夫婦でゐられたが、同居すると、たちまち、衝突するといふ状態であつたのである。

ところで、パリについたワーグナーを待つてゐたのは、失望だつた。もともと今度のパリ入りは、メッテルニヒ侯爵夫人からの招待による。このオーストリアの駐仏大使夫人は、大使公邸には、使つてゐない部屋があり、そこでワーグナーにゆつくり仕事をして貰はうと思つたのであつたが、侯爵夫人の母親が急死し、父親を自分たちのもとに引きとらねばならなくなり、ワーグナーの使ふ部屋がなくなつて了つたのである。仕方なく、ワーグナーは、ホテル「ヴォルテール」といふ安宿の4階に小さな部屋を借りた。

この年のクリスマスごろ、マティルデから『マイスタージンガー』の第1草稿（マリーエンバート草稿）が戻つて来た。しかし、この古い草稿は、役

に立たなかつた。ワーグナーは、新しい草稿をもとに、12月27日からリプレットの執筆にとりかかり、約1ヶ月で一応出来上り（62年1月25日）、1月31日には、清書にまでこぎつけた。ショット社で話した予定表から、少しおくれた程度である。

ワーグナーはパリでの住まいの当てがはずれ、こんな小さな安ホテルに長くゐるわけにも行かず、心当りをいろいろ当つてみたが、皆からことわられたし、パリに住む特別の意味も今はなくなつたので、どこか他のところに移らうと物色しはじめた。2月1日、ワーグナーはパリをはなれ、カールスルーエに行き、バーデン大公と会つてゐるが、その折に、ワーグナーが生活の窮状を訴へると、大公は、年2000グルデンの年金を約束したといふのである。しかし、結果として、そのやうな支給は全くなかつた。そもそも、この話の根拠は、ワーグナーが2、3の友人に云ひふらしてゐるところにあるらしいのだが、どこまでが事実であるかはわからない。

ワーグナーは、カールスルーエから更にマインツに行き、『マイスタージンガー』の朗読会を開いてゐる。これは早くからの計画であり、ウィーンでいろいろ手助けしてくれた、作曲家のコルネリウス（Peter Cornelius, 1824—74）にも、ぜひ、出席してくれるやうに案内状を出してゐる。ウィーンからマインツまでは、やく800キロ、ほゞ東京—岡山間にあたるから、当時としては、かなりの長距離である。車中の時間だけで、25～6時間から30時間かゝつたであらう。それでも、コルネリウスはやつて来た。少し遅刻したけれども、それはライン河の水嵩がまし、交通渋滞したゝめであつた。かうしてはじまつた『マイスタージンガー』朗読は、集つた人々に大きな感銘を与へた。

2月8日、ワーグナーはマインツとライン河をはきんで向ひ側にある小さな町ビーブリヒ（Biebllich）に行き、こゝで家を借り、しばらく住んでみる決心をした。目下のところ、資金源であるショット社のあるマインツにも近いし、閑かではあるし、仕事には好都合であるかにみえたからである。1まづ、ワーグナーはホテルに宿をとり、2月9日には、ヴィースバーデンにグ

ノー (Charles Gounod, 1813—93) の『マルガレーテ』 (*Margarethe*) (別名『ファウスト』) を見に出かけてゐる。ドレスデンにゐるミンナには、ビープリヒに来たことを知らせ、もう1度、共同生活をするか、どうかは、ミンナの判断にまかせると云つてゐる。2月15日、ワグナーはある建築家の豪壮な邸宅 (の1部) を借りて、そこに移り、やうやく落ちついた。21日、とつぜん、ミンナが何の前ぶれもなくやつて来た。新しい住まひでは、荷物の整理が大へんだらうから、その手伝ひに来たといふのである。ところが、次の日には、早くも夫婦は対立した。さらにまた、折りあしく、マティルデからの遅いクリスマス・プレゼントがとゞき、事態は決定的となつた。3月3日、ミンナは腹を立て、ドレスデンへ帰つてしまひ、ワグナーはウィーンのコレネリウスへの手紙で、「地獄の10日間だつた」と云つてゐる (62年3月4日)。

ミンナが去つてから間もなく、ワグナーはショット家での夕食会で、マティルデ・マイヤー (Mathilde Maier, 1833—1910) といふ女性と知合つた。このとき、29歳、美しい顔立ちの、聡明な女性だつた。「マティルデ」といふ名まへは、ワグナーには、特別のひびきをもつ。マティルデ・ヴェーゼンドンクと同名だからである。まるで、トリスタン伝説に出て来る「白き手のイゾルデ」を地で行つたやうである。トリスタンが白き手のイゾルデにひかれたのは、(金髪のイゾルデと同じ) イゾルデといふ名まへのせみではなかつたか。ワグナーもまた、マティルデといふ名まへに魅力を感じたのであつたか。

マティルデ・マイヤーは、父を早くなくし、母と姉と2人の伯母と一緒に、マインツに住んでゐた。(弟はパリで商賣の見習中であつた。) ワグナーはマインツのマイヤー家を、しばしば訪れてゐる。この女性は、ワグナーの悩みを、じつと黙つて聞く「才能」の持主だつた。丁ど、ミヒャエル・エンデ (Michael Ende) の童話に出て来る少女モモ (Momo) のやうに。ワグナーとマティルデとのあひだには、1種の「恋愛」と呼べるものがあつたにはちがひないであらうが、ワグナーが、一緒に旅行に出ようと云つ

たとき、彼女は、母が心配するから、とその誘ひを、うまくかはしてゐる。また、この少し後のウィーン時代、および、さらに後のシュタルンベルク湖畔のペレット荘にゐたときにも、ワーグナーはマティルデに家政を執つてくれるやうにと頼んだが、これまた、婉曲にことわられてゐる。しかし、2人の愛情——あるいは、友情は終生変りなくつゞいた。(マティルデ・マイヤーは生涯独身だつた。)

マティルデ・マイヤーは、『マイスタージンガー』のエーファになぞらへられることがあるが、いふまでもなく、ワーグナーとマティルデが会ふよりまへに、『マイスタージンガー』の台本は出来上つてをり、マティルデがエーファのモデルではない。たゞし、この作品の作曲は、今まさに進行中であつたから、曲を作るうへには、彼女の存在が大いにワーグナーを鼓舞したと云へる。マインツで、マティルデ・マイヤーと会つて間もなく、ワーグナーのところに、もう1人の女性があらはれる。フリーデリケ・マイヤー(Friederike Meyer)である。マティルデ・マイヤーとマティルデ・ヴェーゼンドルクは同名ゆゑにやゝこしいのであるが、マティルデ・マイヤーとフリーデリケ・マイヤーも、つゞりこそちがへ、発音が同じのために、私たちが混乱させる。

(1862年)3月はじめ、ワーグナーはカールスルーエからビーブリヒにもどる途中、フランクフルトに立ちよつた。そこでたまたま見た喜劇に出演してゐたのが、フリーデリケである。この女優は、ウィーンで予定されてゐる例の『トリスタン』公演でイゾルデ役の歌手ルイーゼ・ドゥストマン(Luise Dustmann, 1831—99)の妹といふ関係もあつて、ワーグナーが3月すゑに、あらためて、フランクフルトをおとづれた際に、知合ひになつてゐる。

フリーデリケ・マイヤーは、ワーグナーが家事の手伝ひをたのむと、早速、承諾して、ビーブリヒにやつて来たが、間もなく、「猩紅熱」になつたと云つて、大騒ぎをし、連絡をうけたフランクフルトの劇場監督グアイータ(Guaita)が迎へに来た。それから少しづつ、ワーグナーは、フリーデリケ

がグアイータの愛人であることを知った。

7月から8月にかけて、ワーグナーはビーブリヒで、多くの訪問客をもつた。ビューロー夫妻（ハンスとコージマ）が、しばらく逗留したのをはじめ、ドレスデン蜂起のわりの同志で、長らく刑務所に拘置されてゐたレックルが、13年ぶりで、娘をつれてたづねて来たし、フリーデリケの姉ドットマンも、ウィーンからやつて来た。8月すゑ、ビューロー夫妻を送りかたがたフランクフルトに行き、そこで、フリーデリケが王女役で出演してゐたゲーテの『タッソー』を見てゐる。

11月3日、ワーグナーはドレスデンに行つた。ドレスデンでは、ミンナがかつてワーグナーが住んでゐたころにはなかつた新しい区劃に、家をかりて、ワーグナーを待つてゐた。いつ帰つて来てもし、やうに、快適な仕事部屋を用意し、そして、自分は、嵌め込みベット（アルコーヴ）つきの小部屋に甘んじて、しかし、ワーグナーはこの家に4日泊つたゞけで、11月7日、ビーブリヒにもどつた。（これが、ワーグナーとミンナが顔を合せた最後となつた。）

ビーブリヒでは、小さいが、それにしても、愉快ではない事件が、もちあがつた。広い邸宅の半分をワーグナーに貸してゐた家主が、家全部を使ふ必要が出来たから、といふ口実のもとに、立退きを要求して来たのである。ワーグナーと家主とのあひだのさゝいな感情のゆきちがひが原因だつた⁶⁾。ワーグナーは、仕方なく、マティルデ・マイヤーと一緒に、あちこち家探しをしてまはつたが、さうおいそれとは見つからない。

11月13日、ワーグナーは『トリスタン』上演を催促するために、ウィーンへむかつたが、かねてからフランクフルトには見切をつけて、グアイータとの関係も清算したいと思つてゐたフリーデリケが、途中ニュルンベルクから合流して、2人は11月15日にウィーンに到着した。フリーデリケには、「ウィーンでブルク劇場のオーディションを受ける」といふ目的があつた。それにまた、フリーデリケにすれば、このときのブルク劇場の支配人が、ワーグナーの友人ラウベ（Heinrich Laube, 1806—84）だつたことも、ワーグナ

ーと一緒にウィーンに行く理由となつた。

ウィーンについた2人は、ワーグナーはいつものホテル「皇后エリーザベト」に、フリーデリケは、「ムンシュ」(Munsch)に宿をとつたと、ことさらに『わが生涯』に書いてあるが、それは、この自伝の筆記者がコージマであるのと無関係ではないかもしれない。

ワーグナーは、さつそく、楽長エッサー (Heinrich Esser, 1818—72) に、『トリスタン』のその後の状況をたづねると、練習は熱心につづけられてゐるといふことであつたが、意外にも、ワーグナーとフリーデリケと一緒にウィーンまで旅行したといふ事実が、『トリスタン』に、悪く影響しそうな雲行になつてきた。フリーデリケの姉で、イゾルデ役のドゥストマンは、かねてから、妹とグアイータとの関係を嫌つてゐたのであるが、こゝでまたもちあがつた、ワーグナーとの「誤解されやすい関係」(mein leicht mißzuverstehendes Verhältnis zu ihrer Schwester) のために(『わが生涯』, S. 719), すつかりワーグナーに腹を立て、了ひ、イゾルデ役を降りさうな様子へ見せ、ワーグナーをはらはらさせたのである。

フリーデリケは、ブルク劇場とのあひだに、3回の客演契約を取りつけてゐたが、このときは病後で容貌がやつれてゐたこともあり、本採用にはならなかつた。ワーグナーは、ヴェニスへの転地療養をすゝめ、彼女はそれにしたがつた。そのうち、グアイータとの仲を元にもどし、世間から身をひいて、ひっそりとくらしだした。

フリーデリケ・マイヤーは、ワーグナーの生涯に登場する女性たちの1人として、わづか8ヶ月の短い期間ではあつたけれども、私たちの記憶に、いつまでも残るのである。

注

- 1) „Ich habe mein Werk heute zum ersten Male gehört, ausgeführt von einem Künstlervereine, dem ich keinen zweiten an die Seite setzen kann, aufgenommen von einem Publikum in einer Weise, daß ich beinahe eine Last fühle. Was soll ich sagen? Lassen Sie mich sie in Demut tragen, diese Last, lassen Sie mich nachstreben den Zielen meiner Kunst; ich bitte Sie, mich hierin zu unterstützen, indem Sie mir Ihre Gunst bewahren.“ (Glasenapp: *Das Leben R. Wagners*, III, S.322f.)
- 2) 1860年10月12日, コージマには女の子が生まれたが, 産後, コージマは健康がすぐれず, 咳が付き, 結核ではないかと疑はれ, 61年春からライヘンハルに保養に来てゐた.
- 3) 劇場監督は Lanckoronski 伯爵, 支配人は Salvi.
- 4) ティツィアーノの「マリアの昇天」(Assunta) を, ワーグナーは総督宮殿 (Dogenpalast) で見たやうに云つてゐるが, この絵は, 1818—1919年, 美術学校 (Accademia) にかゝつてをり, ワーグナーもそこで見たはずである. なほ, 現在は, フララー教会 (Frarikirche) の所蔵.
- 5) ○グリム『古ドイツの職人歌について』(*Über den altdutschen Meistersang*, 1811)
○ワーゲンザイル「マイスタージンの優雅な作法について」(*Von der Meistersinger holdseligen Kunst*, 1697, Anhang einer *Nürnberg Chronik*)
- 6) 家主が飼犬を虐待したとして, ワーグナーが非難したことがあり, また, ワーグナーのところの女中が, 仕立屋と関係が出来たとき, ワーグナーは女中を弁護してやつた. この2つを, 家主は根にもつたらしい (『わが生涯』, S.719).

R. Wagner- seine zweite Wanderschaft

Yoshihiro Ito

Am 29. August 1858 kam Wagner ganz betrübt in Venedig an. Zwar hatte ihn der Zufall in die Lagunenstadt geschickt, doch war diese zum Fortsetzen seiner noch nicht fertiggestellten Oper: *Tristan und Isolde* der geeignetste Wirkungsbereich. Seit den berühmten *Sonetten aus Venedig* A. v. Platens ist die Stadt fest der Tristan-Sage verbunden. Indessen drohte der Krieg in Italien auszubrechen. Wagner mußte von Venedig abreisen, wenn er nicht zwischen die Fronten geraten wollte. Wagner begab sich nach Luzern in der Schweiz, und dort vollendete er im August 1859 die Partitur des *Tristan*. Aber er blieb auch diesem Ort nicht so lange. Er meinte, daß nirgendwo anders als in Paris sich eine künstlerische Lebensauffrischung hinreichend zutragen könnte. So versuchte er in Paris sein Glück.

Mitte März 1861 wurde sein *Tannhäuser* dreimal an der Großen Oper gespielt. Wagner hätte beinahe Erfolg gehabt. Die Mitglieder des Jocky-Clubs jedoch störten durch Lachen und Lärm die Aufführungen. Der Fall ist als *Tannhäuser*-Skandal bekannt. Niedergeschlagen siedelte Wagner nach Biebrich bei Mainz über und plante ein neues Werk: die *Meistersinger*. Er beabsichtigte dabei, sein Stück *Tristan* in Wien auf die Bühne zu bringen, was ihm auch diesmal mißlang.